陳舜臣さんと
神戸を歩こう

Ｐａｒｔ　５

陳舜臣さんを語る会

陳さんはたくさんの中国の人たちに養われ、守られ、支えられて来て、その文学もまた同様であろう　足立巻一

陳さんは、国籍は中国であるが、神戸生まれの神戸育ちで、小学校以来日本人の学校で学んだし、平素は中国人を感じさせることはほとんどない。正月には日本人以上にうまく和服を着こなして、酒を飲んだりする。また、日本の悪口をいったことは、一度も聞いたことがない。子どものときから日本人といっしょに暮らしてきて、差別されたり意地悪されたりしたことは一度もないから、特別に日本人に悪感情を持ちようがない、ともいう。

それにもかかわらず、やはり陳さんはまぎれもない中国の大人（ターレン）だと思う。酒は強いが一度も酔態を見せず、信義に厚く、日常生活においても文学活動においても自分の歩調を乱すことはない。

直木賞受賞のお祝いに出かけて驚いたことがある。神戸オリエンタルホテルの大広間で催されたのだが、そこに身動きつかぬほど集まっていたのは華僑の人たちであった。日本人の影はまことに薄く、まして物書き連中となるとどこにいるのかさっぱりわからない。わたしも隅で小さくなり、最後まで主賓にお祝いをいう機会がなかった。『敦煌の旅』で大佛次郎賞を受けたときは、兵庫県民会館で陳さん自身の記念講演があったが、直木賞のときと同様のおもむきであった。

その光景を見て、陳さんはやはりこういうたくさんの中国の人たちに養われ、守られ、支えられて来て、その文学もまた同様であろうと痛感したことだった。

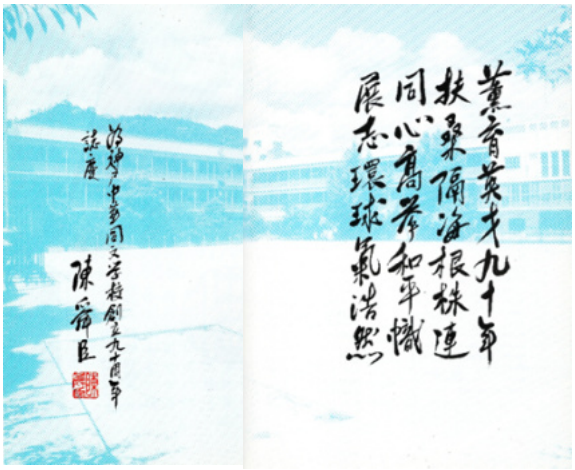
『青玉獅子香炉』（文春文庫）足立巻一「解説」抜粋引用

作家陳舜臣先生　直木賞受賞祝賀会
於：再度山灯籠茶屋前 1969.2.2 撮影
前列右から陳徳仁氏、父・陳通氏、ご本人
立っている人、左から3人目、弟・仰臣氏
神戸武夷登山会『三十週年紀念刊』
（1969年）

陳舜臣さんと神戸中華同文学校の繋がり

陳舜臣氏はご自身のお子様である立人氏と由果さんを一九五九年から七二年まで神戸中華同文学校に通わせました。そして、七三年、神戸中華同文学校（理事長林同春氏）の副理事長に就任し、退任する七九年までの間、学校の厳しい財政の運営に携わりました。副理事長退任後は、同校の顧問を数十年もの長きにわたり担当し、学校関係者の良き相談役として、安定した学校運営に尽力しました。

陳氏は神戸中華同文学校創立九〇周年（一八九九～一九八九）に漢詩を、創立百周年（一八九九～一九九九）にはこれからの未来を展望した文章を祝辞として、それぞれ寄稿しました。



薫育英才九十年にして
扶桑と海を隔てても
根株は連なる
心を同じく和平の幟を高く挙げ
展志環球浩然の氣なり

為神戸中華同文学校創立九十
周年誌慶
陳舜臣

【現代語訳】
徳をもって人を教え導くこと90年にわたり、日本と（中国）は海を隔て離れていても、根元の部分は繋がっている。心を一つにして和平（平和）という目的を高々と掲げ、浩然の氣を以て世界に志を示そう。

23　陳舜臣さんが再度山に登ったのはC(太子の森)ルート

『よそ者の目』「旅にしあれば」、『六甲山心中』「ぼくらは逃げた」、『燃える水柱』などなど、陳舜臣さんの再度山登山についてはいくつもの作品に記述があります。

【1．再度山と大師道】

空海が入唐の前と後、この山の山頂近くにある大龍寺に参詣したので「再度山」といわれています。この時、登ったとされるのが大師道です。神戸にはいくつもの登山の会があり、それぞれ、この大師道途中にある茶屋に署名簿を置き、登山を日課としてきました。

【2. 1938年大水害による登山道の被害】

神戸武夷(ぶい)登山会の長老で、会長も務められた詹永年(せん　えいねん)さんにお話をお聞きしました(2022年)。

「現在、武夷登山会の署名場所になっている燈籠茶屋と稲荷茶屋は、1938年7月の神戸大水害後にできた茶店です。

どちらも、この時の山津波で流され、元の場所からかなり下った今の場所に、店名も変わって再建されました。

燈籠茶屋は、もと、中茶屋と言っていました。稲荷茶屋は、ドック茶屋、天狗屋茶店などと、何度か名前が変わりました。場所は中茶屋よりもう少し上でした」

稲荷茶屋に残る
陳さんの色紙→

【3. 山本通の家と登山ルート】

神戸武夷登山会ができたのは1935年4月です。父陳通氏が創立者の一人であったこともあり、陳舜臣さんは、よく、お父さんと一緒に登ったようです。当時、住まいは、海岸通５丁目の、いわゆる「三色の家」だったので、再度谷川沿いの登山ルートAを登ったと思われます。かなりの距離です。

陳さんが山本通に住むようになって、A、Bでは「登り口までが遠いなあ」と思っているときに、次の記述に出会いました。

私はあまり人の通らない道をえらんで行く。

皇太子御成婚記念につくられた散歩道のあるところは、『太子の森』と呼ばれるが、そこは再度山の本通りではない。したがって、ラッシュアワーをはずせば、この道はほとんど人が通らないといってよい。

（徳間文庫版『燃える水柱』p. 184）

「太子の森」を通過するとわかり、疑問氷解！山本通に住むようになってからの陳舜臣さんの登山は、海外移住と文化の交流センター西の坂がスタート地点です。道なりに登ると追谷墓地へと続きます。この道を、奥再度ドライブウエイのトンネル入口で外れ、太子の森へ向かいます。Cルートだったのです。

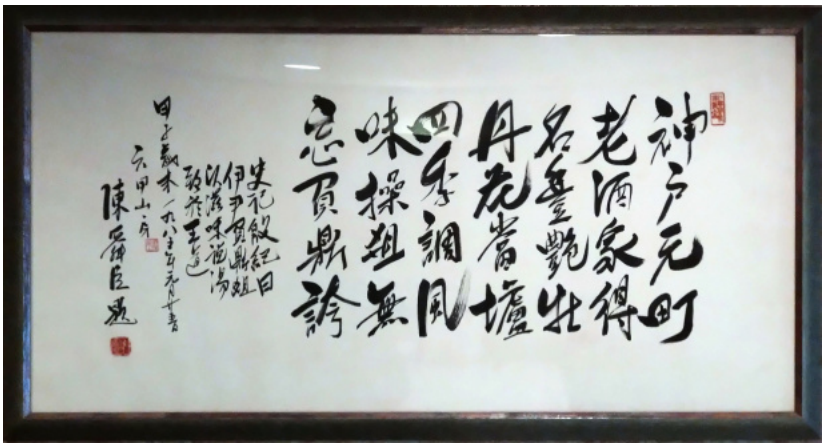
「太子の森」
阪本勝知事の揮毫

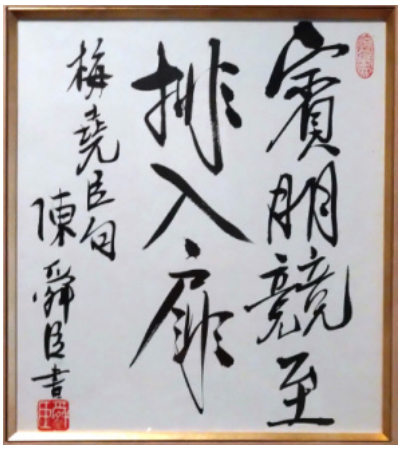
Aは、ほぼ再度谷川に沿ったルート

24　元町商店街附近に残る陳さんの色紙など

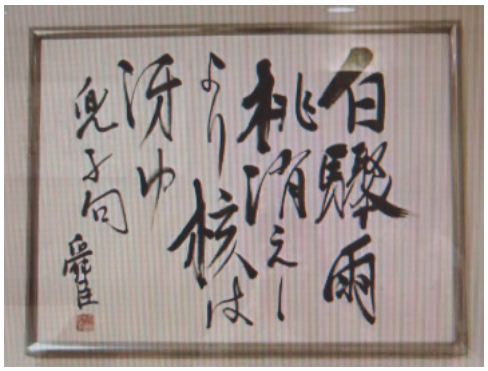
JR元町駅東南泰ビルB1　広東料理　良友
2005、06年頃

元町商店街　フルーツショップ　サンワ
甲戌（1994年）春





大丸神戸店の西北100メートル　別館牡丹園　上の2点及び下段左の計3点
上左の書　甲子歳末一九八五年元月(がんげつ)廿五日と読めます



（別館牡丹園）

モトコー2　ギャラリー喫茶　プラネットEartH
後ろの壁に「滋味百菜　陳舜臣」の色紙
モトコー2、この辺りの店は既に立ち退きになっている

25　陳舜臣さん生誕地の特定作業

陳舜臣さんの生誕地に記念碑を設置しようという動きがあります。それには、まず、生誕地の特定が必要です。このことについて、現在、資料を整理し、多少の調査を行なっております。その中間報告をいたします。中間報告としておりますが、最終報告になるかも知れません。

陳舜臣作品に見える生誕地記述　下線は編集委員の加筆

【『道半ば』p.13】

私の記憶は元町七丁目から始まる。あるいはここが私の生家かもしれない。いまはもう道路になっている。旧三越百貨店のならびの家で、むかいは酒造会社の倉庫であった。それが「白鶴」であったことは後年になって知った。空襲で焼けるまでは健在であり、焼けてから道路になったのである。

【『青雲の軸』（集英社文庫版）p.18】

都市計画でそのあたりはとりこわされて、広い道路になってしまったが、俊仁が生まれた家は空襲を免れて、つい最近まで存在していた。元町七丁目というから、三越百貨店の斜めむかいで、白鶴酒造の倉庫の裏がわにあたっていた。

北に出ると、国鉄の線路が走っている。柵のこちら側はかなり広く、砂地などもあって子供たちの恰好の遊び場であった。

むろん、当時、汽車は高架ではなく、地べたを走っていたので、踏切りがあった。線路のすぐそばが子供の遊び場になるというのは、あまり車が通らなかったからであろう。

▲往来華やかなる三越附近（絵葉書資料館蔵）
元町通西出入口に店を構えていた。三越前に市電が見える。三越の開業は1926年。

【『私の履歴書 ②』（日本経済新聞社）】

そのころ私たちは元町七丁目に住んでいた。父は勤めが栄町か海岸通りの五丁目だから、元町七丁目に借家をさがしたのはとうぜんだったのだ。まだ鉄道は路面を走っていて、いたるところに踏み切りがあった。荷物はたいてい荷馬車ではこんでいた時代である。道路には馬糞のにおいがした。私たち兄弟はそこにあった酒造会社の倉庫前に腰をおろし、忘れた日本語を思い出そうとけんめいだった。

▲ネットミュージアム兵庫文学館企画展示、「陳舜臣　神戸小夜曲」より。元町商店街西出入口に立つ陳舜臣さん。白い車の向こうが"きらら広場"。陳さんの生誕地、元町七丁目は画像に入っていない。もっと右手。

右の図の「宇治川」とあるのは市電の停留所名です。宇治川はこのあたり暗渠です。→

左の地図は『日本近代都市変遷地図集成』（一九二三）の元町七丁目付近拡大図です。
■嘉納合名は一九四七年、白鶴酒造と社名変更。
■一九二六年に開業する三越はまだありません。場所は、山本工作のあたりです。

26　1995年1月17日「悲しみを超えて 神戸よ」そして30年

『神戸ものがたり』(のじぎく文庫)
「一月十七日のこと」より抜粋・引用

一九九五年一月十七日午前五時四十六分。この時刻を私たち神戸に住む人は、忘れることができない。

地底からゴーッという音がきこえたようである。ぐるぐるとひきずりまわされる。これはいったいなんだ。大地がうごいているのだから、地震にちがいないが、こんなに揺れるものとは思わなかった。私は脳内出血で五カ月入院して、退院して四日目の朝であった。目がさめると同時に、あるいは自分のからだの変調ではないかと思った。だが、妻が私のからだのうえにかぶさってきた。病後の私をかばう動作だとすぐにわかった。かばうと同時に、「死なばもろとも」ということがかんじられた。僅かのあいだだが、そうかんじたことで覚悟ができたようである。とはいえまだそんな未曾有の地震とは思わなかった。私の家は高台にあって、市街地に火が出るとみえるのである。

「ああ、あそこも、そちらのほうも火がでているぞ」…。

■当時、陳さん宅は六甲山麓の伯母野山(おばのやま)にありました。

一月二十五日付神戸新聞朝刊に、陳舜臣さんの「悲しみを超えて　神戸よ」が掲載され、不安の中にいる被災者は力づけられました。

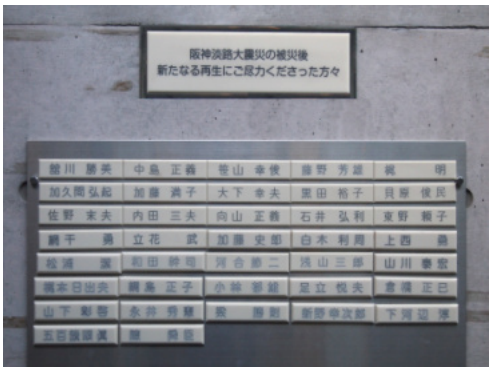
そして30年　東遊園地「慰霊と復興のモニュメント」に陳舜臣さんの銘板が加わる

1.17 希望の灯り

この下が地下室

地下への階段の途中

地下室　被災し亡くなられた方の銘板



再生に尽力された方の銘板

今回、「再生に尽力された方」として陳舜臣さんの銘板が加えられました。

阪神淡路大震災から30年の節目を前に、2024年12月14日、神戸市中央区の東遊園地にある「慰霊と復興のモニュメント」に21人の銘板を加える式典があった。21人のうち11人は直接の犠牲者や被災後の病死者など。亡くなる経緯に震災が影響した人も含まれている。残りの10人は「再生に尽力された方」。モニュメントに刻まれた名前は計5068人。

27　おすすめコース例

転居歴原図は（株）くとうてん提供
（基礎資料は前田康男氏作成）
①～⑥は編集委員加筆

■注釈・補足

△の1は生誕地。4は、いわゆる「三色の家」で、現在、ケンミン食品株式会社の前の道路敷
① かつての新瑞興で、岸本産業株式会社（現社名はKISCO株式会社）に譲渡
② 神戸華僑歴史博物館（画像略）
③ 陳舜臣アジア文藝館
④ 商船三井ビル。陶展文の「桃源亭」が入る「東南ビル」のモデル
⑤ 海軍操練所跡記念碑
⑥ 東遊園地にある「慰霊と復興のモニュメント」